

世界と比較した日本の産婦人科医療

平成29年度 3年3組(16) 坂本梨湖
指導 医学部看護学科 佐伯由香

【研究動機】

- 医師不足や医療訴訟の多い産婦人科の現状について詳しく知りたいと思ったから。
- 妊産婦死亡率が年々減少している日本の背景にあるものは何か、先進国と日本を比べてその原因について知りたいと思ったから。

【研究目的】

- 将来の夢である看護師について産婦人科の視点から研究し、現在の状況や今後みられる可能性のある課題について明らかにする。
- 日本の産婦人科と海外の産婦人科を比較して、双方の特徴をまとめ、日本に取り入れるべき医療体制について考える。

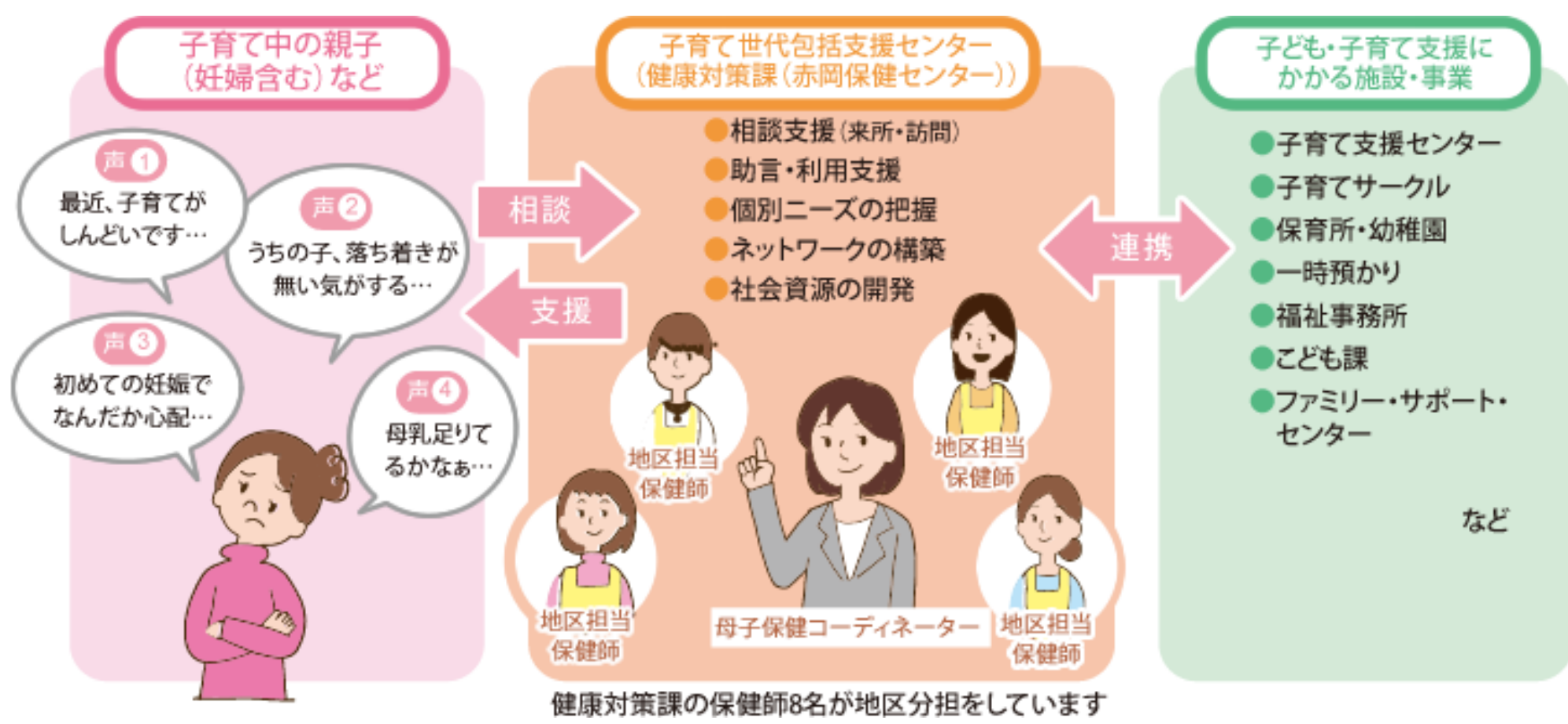
〈産婦人科とは〉

→主に女性の生殖器の病気を扱っている。

産科…妊娠、出産、産後の検査 帝王切開術、流産の手術、産後腫などの傷の手術 など

婦人科…生殖器のがん、性感染症、不妊・生理不順などの治療 子宮筋腫、卵巣腫瘍など良性の腫瘍に対する手術、不妊症に対する手術、避妊のための手術 など

〈産後ケア事業〉

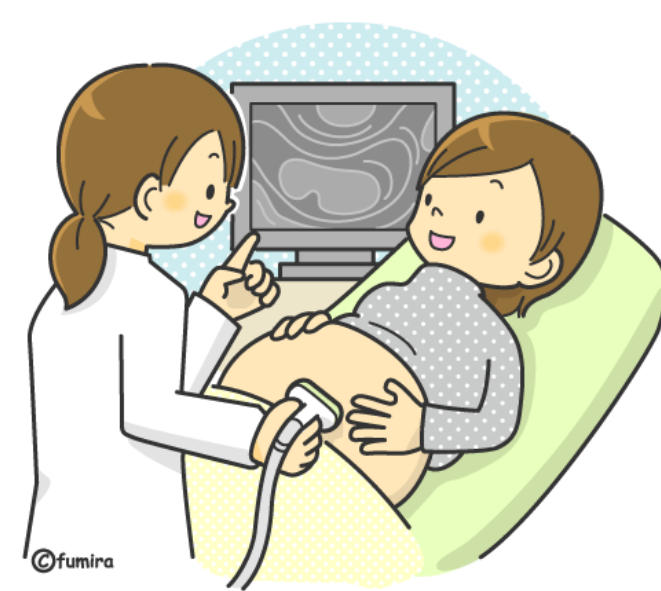


↑子育て世代包括支援センターの機能

〈海外との比較〉

(日本)

- 出産後の滞在日数が比較的長い
- 検診をこまめに行う
- 母親学級が主流
- 出産後は保健師が自宅訪問



(海外)

- 出産後は早くても数時間後、長くても5日後には母子ともに退院
- 無痛分娩が主流
- かかりつけの助産師、看護師が自宅を訪問してくれる
- 最低限の検診のみ
- ペアレンツクラス(両親学級)が主流

〈まとめ〉

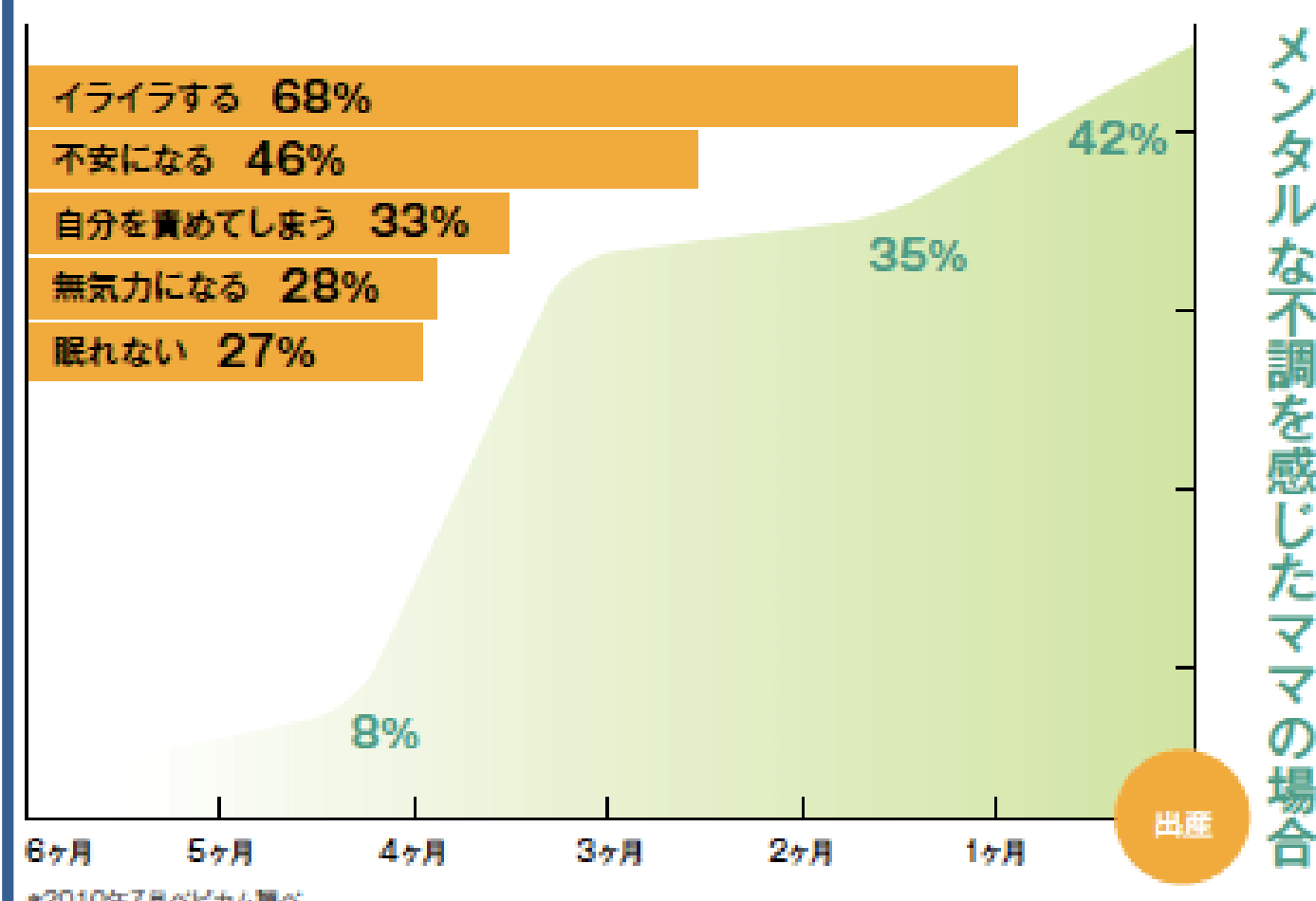
○日本にも取り入れるべきだと考える海外の医療体制は、妊娠から出産産後までを同じ産科医師、**ケアマネージャーが担当すること**。このことによって担当がたびたび変わることを防ぎ、切れ目のないつながりが作られる。さらに安心した出産ができる環境を提供できるのではないかと。

○医師の不足、過重労働は産婦人科に限ったことではないが、命の誕生にかかわる環境での仕事は**医療訴訟**も起きやすいのではないかと。

○今回の研究を通して、産婦人科の看護師になりたいという気持ちはさらに強まり、**周産期医療の先端**に立って産婦人科の課題に取り組んでいきたい。

〈産後のメンタルヘルスケア〉

①産後うつ…育児へのプレッシャーや不安がストレスになり発症する精神疾患



- 対策①完璧にやろうとしない
②睡眠時間を確保する
③育児本を参考にしすぎない
④周りが育児に参加する

治療方法: カウンセリング、薬物療法、抗うつ剤投与 など

②産褥期精神病(さんじょくせいしんびょう)…原因不明で発症率が出産500件に1人の割合で、産後うつよりも注意が必要

- ・産褥期精神障害の中で**重症度の高い**疾患。
- ・**自殺に至るケース**も。殺意念慮を持つこともある。
- ・再度かかる確率は**5分の1**を超えている。

〈現在の課題・対策〉

- ①**産科医師の不足**…労働環境、法制度、患者の意識など
対策: 定年延長、研修制度改革、医療費抑制
- ②**過重労働**…助産師不足、看護師内診問題など
対策: 周産期施設の集約化、重点化
- ③**医療訴訟の増大**…診断ミス、妊婦のたらい回しなど
対策: 救急搬送システムの整備、医師の集約化

〈考察〉

- 日本よりも海外の方が産後における取組は発展している
- 海外の検診は最低限であるため、超音波で赤ちゃんの様子を見られるのは**多くて2回**
- 海外のお産方法は日本で行われていないものもある
- 日本で受けられる手当は約42万円、海外で出産する場合に受けられる手当は約39万円と、日本で出産する場合の方が**公的な扶助**が多く出る
- 赤ちゃんの状態、気を付けるべきことについて入院中に深く学べるのは日本
- 海外では担当医と母親との距離が密接で、**切れ目のない体制**が確立されているため、相談がしやすい

〈謝辞〉

この研究を進めるにあたって指導・準備をしてくださった愛媛大学医学部看護学科の佐伯由香先生、インタビューに答えてくださった崎山先生、その他課題研究のための日程を考えてくださった辰野洋平先生、本当にありがとうございました。